

バイの放流事業復活に向けて。

バイは昭和40年代、鳥取県全体で50t~80tの漁獲がありました。かつては籠漁業だけでなく小型底曳網でも漁獲され、西部地区ではお祭りに欠かせない食材として馴染みの深い貝です。

しかし、船底塗料や養殖網の防汚材に含まれる有機スズ化合物の影響で、雌が卵を産めなくなるという障害を受け、バイの資源は大きく減少しました。このため、地域によってはバイ漁業が成り立たなくなり、平成4年の漁獲量は2tを切るまでに激減しました。その後、有機スズ化合物の使用が規制されたことから少しずつ資源が回復し、平成16年以降は20t以上の漁獲となっています(図12)。

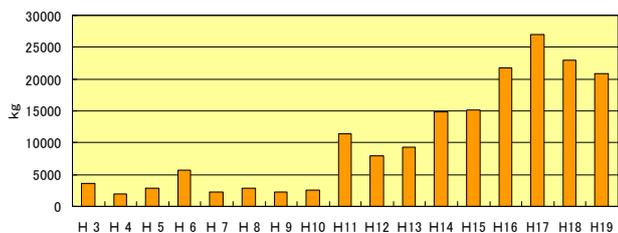


図12 鳥取県のバイ漁獲量

回復傾向にあるバイ資源ですが、漁獲量は平成17年をピークにやや減少しており、漁業者からも「また資源が減ってきているように感じる。稚貝の放流や資源管理をしなくては・・・。」という声が聞かれます。バイ籠漁業は省コストと少労力で行える効率の良い操業形態の反面、獲り過ぎたり、小型の貝まで獲ってしまう傾向にあります。再び資源の悪化を招かないような対策をとる必要があると思われます。

一方、バイ資源の安定と増加を目的に昭和56年から取り組まれてきた放流事業は、親貝の入手が難しくなってきたことや種苗の生産が不調となったことから継続が困難となり、平成8年度から休止となりました。それ以降、生産技術の再構築のため県栽培漁業センターでは基礎的生産技術の見直しなどを行い、平成14年度からは(財)県栽培漁業協会が大量生産に向けた新しい技術の開発を行ってきました。この間、必ずしも順調

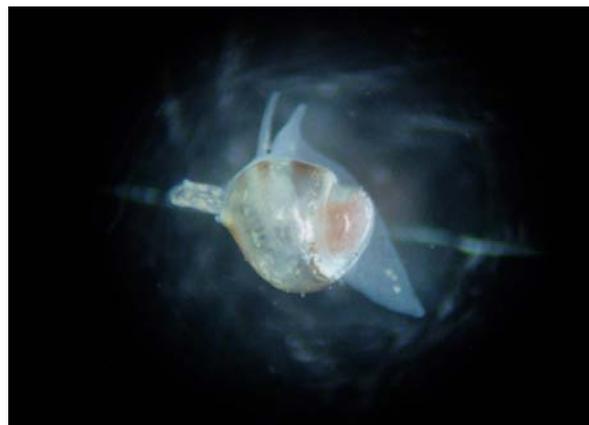


図13 着底直後のバイ稚貝

に技術が進んだわけではありませんが、平成18年度にはウナギの配合飼料を用いることで飼育初期の稚貝の生き残りが高まること、平成19年度には海水を強力な紫外線で殺菌した場合に稚貝の生き残りが良いことなどの結果を得ました。

平成20年度はそれらの結果を参考に試験に取り組み、殻高10mmの稚貝を10万個生産するという目標をかかげ、殻高3mm~11mmの稚貝を6万個生産することができました。目標数量には達しませんでした。過去3年の生産結果が9千~1万4千個だったのに比べて大幅に増加し、生残率も従来は1%前後だったのに対し5%程度に向上しました。ただし、単年の結果ということと、まだ解決しなくてはいけない課題も残っていることから、事業レベルでの生産にはあと少し時間がかかりそうです。バイの種苗放流は漁業者の期待も大きいことから、なるべく早いうちに事業再開に漕ぎつきたいと関係者も意気込んでいます。



図14 飼育容器内の稚貝